

# 英国図書館研修報告

## ヨーロッパの日本研究図書館訪問も交えて

よしい ゆ き こ  
吉井由希子  
(三田メディアセンター)

### 1 はじめに

2019年10月下旬から2020年1月末までの約3か月間、英国研修の機会を得た。この研修は2012年に始まったプログラムで、毎年1名、セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館に受け入れていただき、業務を体験する傍ら、英国ほかヨーロッパ諸国の日本研究図書館を訪問し情報交換を行っている。筆者は、研修期間中、英国、ベルギー、ドイツ、スイス、ノルウェーの図書館を訪問する機会に恵まれた。主な訪問先と日程は表1に示す。本稿では、図書館システムと、ヨーロッパにおける日本研究図書館の状況の2点に話題を絞って報告する。

表1 主な訪問先

| 日程       | 訪問先                                          |
|----------|----------------------------------------------|
| 下記以外の期間  | セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館                  |
| 11/6     | 日本国大使館広報文化センター図書館<br>Japan Library Group（会議） |
| 11/7     | 大英博物館<br>ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 (SOAS) 図書館       |
| 11/8     | Paul Mellon Centre Library                   |
| 11/26    | ケンブリッジ大学図書館                                  |
| 12/6     | ルーベン大学図書館                                    |
| 12/9-10  | ケルン日本文化会館図書館                                 |
| 12/10    | ケルン大学日本学科図書館                                 |
| 12/10    | 東亜美術館図書室                                     |
| 12/11    | ハイデルベルグ大学中央図書館                               |
| 12/12-13 | ハイデルベルグ大学CATS図書館 東アジア部門                      |
| 12/16-17 | チューリッヒ大学東洋学部日本学科図書館                          |
| 1/13     | オスロ大学図書館                                     |
| 1/20-21  | 大英図書館                                        |

### 2 図書館システム：Primoと日本語資料検索に関する話題を中心に

筆者が渡英する1か月半前の2019年9月2日に、慶應義塾大学メディアセンター（以下「メディアセンター」とする）は、早稲田大学図書館との共同に

よる図書館システムの運用を開始した。Ex Libris社のAlmaおよびPrimoVEの採用および共同運用は、国内では初であったが、ヨーロッパを含む海外の多くの図書館で同システムは採用されており、共同運用の事例も存在する。筆者は、レファレンス担当として、新システム稼働直後、利用者の反応を間近に見ることになったため、Primoのインターフェイスおよびディスカバリサービスが海外でどのように評価されているのか気になっていたが、ヨーロッパの日本研究図書館員の間では、特にPrimoの日本語検索の不具合やその調整の難しさが話題に挙がっていると聞いた。今回訪問させていただいた図書館すべてがEx Libris社のシステムを採用していたわけではないが、この章ではPrimoに関する話題を中心に提起し、海外の図書館員、特に日本研究資料を担当する方々へのインタビューを通して見えた、ヨーロッパの図書館におけるシステム導入状況とその評価について紹介する。

#### (1) 図書館システムの導入状況

EAJRS（日本資料専門家欧州協会、以下「EAJRS」とする）が2018年に主としてメンバー機関に対して行ったアンケート<sup>1)</sup>によれば（回答数26）、Ex Libris社の製品を図書館システムとして採用している機関は半数以上、ディスカバリサービスを導入している機関はほぼ半数である。訪問した国のうち、ベルギー、ドイツ、スイスのドイツ語圏、ノルウェーでは図書館システムの共同運用が行われている。それぞれ以下に簡単に紹介する。

ベルギーでは、LIBIS<sup>2)</sup>というベルギー内の図書館システムの提供・サポートを行っている機関が、Ex Libris社製品の仲介者となっており、導入からその後のサポートまでLIBISを通して行われている。図書館システムではLIBIS加盟館の所蔵をまとめて確認できるようになっている。なお、LIBISはルー

ベン大学の敷地内に置かれているが、現在は大学とは別組織である。

ドイツは、連邦国のため図書館システムは地域ごとに独自システムを発展させてきた歴史があるが<sup>3)</sup>、近年はいわゆるパッケージ製品の導入、さらには地域をまたいでの共同運用も進みつつあるようだ。ドイツの6つの地域ネットワークセンターのうちの3つにあたるGBV, BSZ, hbzによる共同プロジェクトであるCBDZ<sup>4)</sup>では、Almaを採用したシステムの共同運用を行っている。

スイスのドイツ語圏では、スイスの図書館連合の一つであるNEBIS<sup>5)</sup>が、図書館システムとしてAleph, Primo (2019年現在)を採用し、参加館に提供している。システムの導入からサポートまでをNEBISが担当し、各機関向けのPrimoインターフェイスもNEBISが用意している。図書館システムではNEBIS加盟館の所蔵がまとめて確認できるようになっている。

ノルウェーは、早くから国レベルのコンソーシアムによる図書館システムの共同運用を行っていることで知られる。ノルウェーのコンソーシアム組織であるBIBSYS<sup>6)</sup>は、かつては独自の図書館システムを構築運用していたが、現在はEx Libris社のシステムを導入しており、ノルウェー全域の図書館で共同運用されている。

ディスカバリサービスの導入およびシステムの共同運用により、書誌・所蔵データの共有が容易になり、サービスの連携が図りやすくなると考えられる。ヨーロッパのこれらの国々における図書館サービスの連携体制は、今後メディアセンターのサービスを検討するうえで参考になるように感じる。一方で、もう一つ興味深く感じたのは、図書館システムに関する業務が地域レベルの組織に集約されていることで、現場の図書館員にとっては、日々図書館システムの心配をしなくて良いというメリットと、図書館システムの仕様を知る機会が減るというデメリットの両方がもたらされているということであった。訪問した図書館の方々へのインタビューの中で、図書館システムに関しては担当部署に任せていれば良いので安心してサブジェクトライブラリアンとしての業務に専念できる、という話も聞いたが、システムに対する問題や疑問が出た際に、原因や解決策を考えるための十分な情報がなくて困るという話を聞く

こともあった。図書館システムが安定的に運用されている一方で、(3)で触れる日本語検索問題のような現場の担当者にしか分からない問題に直面した場合、迅速な対応が難しくなるケースがあると考えられる。

## (2) ディスカバリサービスの評価

ディスカバリサービスに関して、メディアセンターでは、以前は使用頻度の高い一部のデータベースに限定して運用していたが、新システム稼働後は、利用可能なほぼすべてのデータベースを検索対象としている。新しいKOSMOSは、慶應義塾だけでなく早稲田の所蔵も確認でき、さらには世界中の学術情報(論文・記事)が検索できる、本格的なディスカバリサービスシステムとなった。このことは、Google検索に慣れた学部生などには抵抗なく受け入れられたように見えたが、大学院生や教員など、以前のシステムに使い慣れていて、かつ厳密な検索を求める利用者からは、仕様のはっきりしない「なんでも検索」への戸惑いや、これまでは検索できていた資料がヒットしないといった仕様の変更または不具合に対する不満の声が寄せられることもあった。

一方、ヨーロッパの機関では、ディスカバリサービスは好意的に受け入れられているようで、訪問中にネガティブな意見を聞くことはなかった。日本語検索問題に直面している日本研究図書館員でさえ、一次情報へのアクセスが容易になることや、情報の可視性が上がることの利点を評価し、ディスカバリサービスの導入自体は肯定的に捉えていた。利用者の反応についても、最初は戸惑いの声が聞かれることがあったが1年もすれば慣れて、使いやすいという声のほうが大きくなっているという話もあり、少し勇気づけられたような気がした。

## (3) 日本語資料検索問題

Primoを導入しているヨーロッパの図書館において、少なくとも日本語資料を担当する司書の間では、日本語検索に問題があることが認識されている。ここで「少なくとも」としたのは、問題が日本語あるいはCJK言語に特化しており、これらの言語を使う人でなければ認識できないためである。本稿では詳細に触れないが、Primoは海外製品であり、元々日本語環境での使用が想定されているものではないた

め、メディアセンターの図書館システムにおいても日本語検索の調整に苦勞した経緯がある。訪問したヨーロッパの図書館の中には、日本語資料を検索しても、本来ヒットするべきものがヒットしない（あるいは検索結果の上位にヒットしない）といった現象が、致命的なレベルで見られるケースがあり、英国のケンブリッジ大学やベルギーのルーベン大学の図書館では、日本語資料を探す場合は、自館のOPACではなくCiNii Booksを用いることを利用者に案内せざるを得ず、そのためにCiNii Booksへの所蔵登録は欠かせないという話を聞いた。現場担当者としては、受け入れた資料の目録を作成しても検索できないということは非常に残念な事態であるが、ヨーロッパから見ればマイノリティ言語である日本語検索の問題はなかなか周囲に理解されず、大学のシステム担当者に訴えても、優先順位の高い問題として取り合ってもらえないのが現状のようである。

#### (4) 情報共有

先述の通り、日本語をはじめとする非ヨーロッパ言語の問題は、認識されづらい状況がある。問題の内容は、システムに起因するものから、ローカルレベルでの設定により解決可能なものまで様々であるが、現場担当者に十分な情報が届いていないために、切り分けが難しいこともある。そのような状況の中、ヨーロッパ内の日本研究図書館ネットワークを通して、情報共有、知識共有が行われるようになってきている。ドイツ語圏では、PrimoのCJK検索問題に関しては、ベルリン自由大学の情報提供が大きな役割を果たしているとのことである。他機関の前例を参考に解決策を見出すこともあるようだ<sup>7)</sup>。

訪問先で、メディアセンターの新システム稼働について話をしたところ、特にPrimoを使用する図書館の方々には興味を持っていただき、何人かの方からはEAJRSのような場で報告してはどうかという提案もいただいた。日本語検索問題に対するシステム面の解決策に関しては、日本語を母国語とする図書館の事例を、ヨーロッパ言語を母国語とする図書館に当てはめることはできないため、直接的に参考情報を提供することは難しい。しかし日本の図書館がヨーロッパの情報共有の場に加わり双方が状況を理解することで、日本語検索機能向上の必要性について認知を広め、提供元に訴えかけていく力を強め

ることに繋がるのではないかと感じた。

### 3 ユーロッパにおける日本研究図書館

この章では、研修全体を振り返り、拠点として3か月間を過ごしたセインズベリー日本藝術研究所および英国をはじめとするヨーロッパの日本研究図書館の状況について、それぞれ感じたことを述べたい。

#### (1) セインズベリー日本藝術研究所 リサ・セインズベリー図書館

セインズベリー日本藝術研究所（以下「研究所」とする）は、英国の南東部に位置するイーストアングリア地方のノリッジという街にある。ロンドンから電車で約2時間ほどであるが、中世ヨーロッパの美しい街並みを残し、自然豊かなノリッジの風景の中にいると、全く別世界にタイムスリップしたような気にさせられる。



図1 セインズベリー日本藝術研究所

約3か月の研修中、他の図書館を訪問している期間以外は、研究所内のリサ・セインズベリー図書館に身を置き、資料整理業務等に携わらせていただいたほか、研究所が主催するイベントにも参加させていただいた。研究所および図書館の概要については、これまでの英国研修者によってすでに紹介されているためここでは割愛するが、3か月を過ごしたこの場所で感じたことについて触れないわけにはいかない。ここでは、滞在中に見聞きした最近の状況も交え、私見を述べることにしたい。

リサ・セインズベリー図書館における研修は、専門図書館が持つ独自性や役割の重要性について改めて考える機会となった。蔵書数5万冊程度と規模は決して大きくないが、研究所の研究員やフェロー



の研究活動において必要とされる資料を強力に収集し、司書が蔵書を知り尽くしていることで、研究所における学術研究サポートはもちろんのこと、英国のみならずヨーロッパ諸国においても日本研究図書館の一つとして大きな役割を担っている。日本美術および考古学資料に特化したいわゆるニッチな図書館と言えるが、高い専門性と独自性は、資料規模も含めて強みであるように感じられた。

研究所では、日本の芸術や文化に関する情報発信を様々な形で行い、イベントも数多く開催している。その一つである毎月第三木曜日の夜に行われるレクチャーには、研究者のみならず近隣住民の参加も多数あり、遠く離れた英国ノリッジで日本に興味を持ってくださる方がたくさんいることに驚くとともに、この地が日本研究の拠点として認知されていることを実感した。



図2 第3木曜夜のレクチャーの様子

今後、研究所は、資金援助者であるセインズベリー家の意向により、イーストアングリア大学の敷地内にある、セインズベリー視覚芸術センター内への移転が予定されているとのことである。現在の研究所は、ノリッジの街中心部のノリッジ大聖堂の敷地内にある。アクセスも良く、街の魅力を最も感じる事ができるこの場所自体が研究所の魅力の一つであり、認知度の向上に一役かっているのではないかと考えると、街の中心部からバスで20分もかかる大学の敷地内への移転により、研究所および図書館の独自性が薄れるのではないかと懸念があるが、一方で大学との連携がより容易になることも考えられる。研究所および図書館の今後ますますの発展に期待したい。なお、研究所とイーストアングリア大学は元々連携関係にあり、2020年秋には両機関のス

タッフによる日本研究のMAコースが開講予定である<sup>8)</sup>。



図3 左：研究所、右：ノリッジ大聖堂

## (2) 英国・ヨーロッパにおける日本研究図書館

英国およびヨーロッパの日本研究図書館の多くは、担当者が1名もしくは少数名であり、限られた人員と予算の中で研究支援を行っている。特に英国では、ここ数年、長年勤めた司書の定年退職による世代交代の時期を迎えており、日本人司書の割合が減少しているほか、いわゆる司書ではなく日本研究者が後任として採用されるケースもあると聞く。人員に空きが出たタイミングでの採用となるため、時間をかけての業務の引き継ぎや、職場内で人材育成を行うことは難しい。採用されるのは専門性を持つサブジェクトライブラリアンであるから、このことを必ずしもマイナス面と捉えることはできないが、数十年にわたって1人の司書が運営してきた業務を引き継ぐことの苦勞もあるのではないかと想像する。

こうした状況の中、ヨーロッパ全体のEAJRSや、英国内のJapan Library Group (JLG)、ドイツ語圏の日本関連図書館連絡会といった図書館グループの存在は大きい。これらのコミュニティを通して、図書館員同士が情報共有し、連携体制を整え、図書館サービスを発展させてきた。私自身、今回の研修の中で訪問させていただいた図書館の方々との交流を通して、ヨーロッパ内の日本研究図書館員の人的ネットワークの強さを実感した。

資料の提供という面では、主にドイツ語圏ではベルリン国立図書館東アジア部門、北欧ではNIAS (Nordic Institute of Asian Studies) といった組織が大きな役割を果たしている。これらの組織が運営するポータルサイト<sup>9, 10)</sup>から、メンバー機関およ

びその機関に所属する利用者は、有料電子リソースを含めた学術情報にアクセスできるようになっている。ベルリン国立図書館東アジア部門は、ドイツ語圏で日本関連資料を収集する図書館として最も規模が大きいことで知られるが、ドイツのメンバー館に所属する利用者からの資料の購入希望を受け付けるほか、ドイツのみならず、スイスやノルウェーといった他のヨーロッパの国々の提携機関にも無料の貸借サービスを行っている。ヨーロッパの多くの日本研究図書館は、財政面の問題から、所属研究者が必要とする分野の資料を重点的に収集し、自館で賄えない資料については、こうした図書館間の相互協力によってカバーしている。

ここで、日本の図書館も海外の日本研究図書館と積極的に関わり、日本研究支援への貢献について考えていくべきであるということを述べておきたい。ここまで紹介したように、ヨーロッパの日本研究図書館は、様々な連携体制を駆使して日本研究を支えているが、必ずしも充分な環境が整っているとは言えない。例えば、日本国内ではさほど苦勞なく入手できるはずの資料が、海外であるがゆえに入手が困難であるといったことは珍しくない。これは、日本の図書館が海外へのサービスに対応できない、著作権の問題により海外ではデジタル化の恩恵を受けられないなど、様々な事情によるものではあるが、何年も前から指摘されている問題にいまだ改善が見られないのは残念である。ヨーロッパには日本に関心を持つ若者が多くいて、日本研究を志す学生は決して減っていないと聞くが、研究環境が充実していかなければ、この先海外における日本研究は衰退していくであろう。海外における日本研究支援には、日本の協力が不可欠であり、その中でも図書館間の連携の重要性は今後もっと多くの人々に認識されていくべきである。JLGやEAJRSのようなコミュニティに、日本の図書館が積極的に関わり、情報交換を行っていくことも、現状の問題点を認識し、改善していくきっかけになるに違いない。

#### 4 おわりに

帰国して間もなく、新型コロナウイルスが世界で猛威をふるい、世の中の生活が一変する事態となった。約3か月の滞在を通して、美しいノリッジの街の魅力にすっかり取りつかれた私は、今年の夏は是

非とも休暇を使ってプライベートで訪れたいと考えていたが、もはやそれどころではなくなってしまった。お世話になった方々との帰国後すぐの情報交換の話題が、新型コロナウイルスとなってしまったのは残念であったが、このようなときにお互いの状況を伝えあい、交流を持てる人ができたということは、私にとっては本当にありがたいことであった。ヨーロッパの状況を常に身近に意識するようになったことは、この研修を通して私の中で大きく変わったことの一つである。公私ともに多くの貴重な出会いがあり、それこそがこのたび私が得た最大の財産である感じている。海外の図書館見学や出会った方々との交流を通して、ここでは報告しきれないが本当に多くのことを学ばせていただいた。出会った方々との繋がりを大切に、この研修で得たことを今後、何らかの形で少しでも還元できるよう努めたいと思う。

最後に、今回の研修全般をコーディネートし様々な出会いのきっかけを与えてくださったリサ・セインズベリー図書館の平野明さん、温かく迎えて入れてくださった研究所の皆様、訪問先で受け入れてくださった司書の皆様、滞在中に交流を持たせていただいた方々、そして様々な方面から支えてくださった職場の皆様に心から感謝を申し上げたい。



図4 ノリッジ大聖堂敷地内より

注・参考文献：

- 1) Magnussen Naomi Yabe, Kamiya Nobutake, Arjan van der Werf. "Result of the questionnaire on library systems and cataloging (2018) : 図書館システムについてのアンケート結果と考察". EAJRS.  
<https://www.eajrs.net/result-questionnaire-library-systems-and-cataloging-2018>, (参照 2020-07-20).
- 2) LIBIS.  
<https://bib.kuleuven.be/english/libis>,  
(参照 2020-07-20).
- 3) ドイツ図書館協会のサイトに地域ネットワークシステムの概要マップが掲載されている。Deutscher Bibliotheksverband e. V. "Verbundsysteme in Deutschland"  
<https://bibliotheksportal.de/informationen/bibliothekslandschaft/bibliotheksverbuende/>,  
(accessed 2020-07-23).
- 4) Common Bibliographic Data Zoneの略。CBDZ.  
<https://www.bszgbv.de/weitere-kooperationen/cbdz/>,  
(accessed 2020-07-23).
- 5) NEBIS.  
<https://www.nebis.ch/en/frontpage/>,  
(accessed 2020-07-23).
- 6) BIBSYS.  
<https://web.archive.org/web/20170909034959/http://www.bibsys.no/en/>, (accessed 2020-07-23).
- 7) 神谷信武. チューリッヒ大学における, 日本研究支援の現状. 情報の科学と技術. 2017. vol.67, no.6, p.290-295.
- 8) "MA Interdisciplinary Japanese Studies : Launching in September 2020". Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures.  
<https://www.sainsbury-institute.org/teaching/ma-in-interdisciplinary-japanese-studies>,  
(accessed 2020-07-20).
- 9) ベルリン国立図書館東アジア部門は, アジア学の情報ポータルサイトであるCrossAsiaを提供している。CrossAsia.  
<https://crossasia.org/>, (accessed 2020-07-20).
- 10) NIASはAsiaPortalというサイトを運用し, 北欧におけるアジア研究をサポートしている。AsiaPortal.  
<https://www.asiaportal.info/>, (accessed 2020-07-20).